

大学教師

イ・グレーコワ著 ● 前田 勇 訳

И. Грекова

群像社

訳者 前田 勇 (まえだ いさむ)

1931年、北海道石狩国樺戸郡新十津川村に生まれる。早稲田大学大学院修士課程修了。その後帰国してソ連貿易に従事、モスクワ駐在員事務所長を務める。現在、経団連・日ソ経済委員会アドバイザー。

現代のロシア文学 第二期第二巻

大学教師

一九八八年九月十五日 初版発行 ©

定価 二五〇〇円

著者 イ・グレーコワ

訳者 前田 勇

発行者 浅川 彰三

発行所 株式会社 群像社

〒101 東京都千代田区猿楽町二一三ー一

振替 東京 四一九五九四三

電話(〇三)二九一―六一五三

印刷・製本 岩城印刷株式会社

万一落丁乱丁の場合はおとりかえ致します

ISBN 4-905821-82-7 C0097 ¥ 2500 E

大学教師

イ・グレーコワ著 ● 前田 勇 訳

群像社

此为试读, 需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

ブックデザイン／志賀紀子

目次

大学教師 7

私の文学活動について——作者は語る

387

訳者あとがき 394

主な登場人物

ザワリーシン教授（ニコライ・ニコラーエヴィチ） サイバネティックス（人工頭脳）学科主任で世界的に著名な数学者。妻ニーナ・フィリップポヴナとは死別。

アスターシヨワ（ニーナ・イグナーチエヴナ） サイバネティックス学科の助教授。四十歳。父親の違う二人の男の子（サイキンとイワン）を産み、死んだ親友の子（ジームカ）も引きとり育てている。現在の恋人は映画監督のワレンチーンで、ジームカの父親。

サイキン（アレクサンドル・グリゴリエヴィチ） アスターシヨワの長男。十歳の頃から弟のイワンとジームカの面倒を見ている。

リューダ・ヴェリチコ 学生。母一人娘一人の家庭に育ち、モスクワに出てサイバネティックス学科に入学。寮の同室者はアーシャ・ウマンスカヤ。アーシャ・ウマンスカヤ 全科目満点の最優秀学生で特待生。太っちょ。

寮の同室者はリューダヴェリチコ。

マイヤ・ドウドロワ（愛称マイカ） 学科の実験室に勤める。歌手志望でザワリーシン教授から金銭的援助を受ける。

リーディヤ・ミハイロヴナ 学科の事務担当秘書。夫とは死別し、娘夫婦のラーリサとボリースと共に暮らす。

ダーリヤ・ステパーノヴナ ザワリーシン教授のアパートの隣人。
ヴィクトル・アンドレーヴィチ・フリャーギン 教授。工学博士。ザワリーシン教授の後任として学科主任候補に迎えられ、新しい学科運営を行う。

大學
教師

学科教員会議

陽の光にかすかに金色を帯びて短い冬の日が終ろうとしている。その冬の陽がからまった蜘蛛の巣が今にも破れそうだ。窓の外、大学構内では凍て付いた木々の枝を風が揺すっている。あちこちに二、三枚生き残った木の葉がそよいでいる。

三八七番の部屋（本部校舎の三階）では学科教員会議が進行中である。窓のそばの部屋のすみのどっしりした旧式の机に向かって腰を降ろしているのが学科主任のニコライ・ニコラーエヴィチ・ザワリーシン教授——頭文字のNをふたつ続けてNNと陰で言われており、面と向かって言う人もいる——。彼は気を悪くはしていない。NNは立派な名前だ。前世紀には無名なものや仮名のもを、こう名付けたものである。《県庁のあるNN市の旅館の門に……『ゴーゴリ『死せる魂』の書き出し》これも無名で仮名である。

見たところ、この人は頭の後ろと両側を白髪で縁どって円錐形に頭頂部が黄ばんではげている小柄な老人である。指ほどの厚さの眼鏡のレンズが眼を覆っている、眼の表情は分りにくい。灰色の両耳、ぐらぐら動く入れ歯、まばらなブラシのようなひげ——それらすべてが、何かこわいというよりも、風変りな外貌を彼に与えている。だが、それになじめないわけではない。この学科ではもう慣れっこになっている。人形劇で露骨に戯画化されたキャラクターが愛らしい場合が

あると同様に、エネンの容貌はそれなりに愛すべきものとみなしている人さえある。人に対しては思いやりがあり、故なしに人を責めたりしない——これ以上のことを学科主任に要求できるものだろうか。しばしば話好きであること、これはどうしようもない。誰にでも欠点はある。大事なのは《人を悩ませないこと》である。

少し離れて、はっきりと独立を保って、学科主任エネンの代理のクラフツォフ助教授が腰かけている——褐色丸顔、体つきはきゅうりのようで、うすいあごひげがある。これはなかなかのたぬきだ。まだ若いのに(三十五歳)、最新流行のテーマ《自律システム理論におけるシステム技術の方法》という博士論文を事実上すでに完成させている。彼はエネンが死んだ後(あるいは老齢で退職したら——彼は別にエネンに不吉なことがおこることを期待してゐるわけではない)は、その地位を継ぎ学科に秩序をもたらすのは自分だと確信している。そのほかにもまだまだ誘惑的な将来の情景が描かれる。アカデミー準会員に、もしかしたら正会員だ。慌てることはない、まだ若いんだから。

学科教員の部屋は、幅が狭く長い部屋であるが、これは昔の、革命前の建物の何か接客用の部屋だった。雨もりのあとが赤褐色ににじんだ天井は高々としており、五メートルはある。天井の蛇腹には凝った漆喰の模様がある。古風な建物は半ば破損の状態にある。この大学のために既にどこか市の周辺で、市の中心から乗物で一時間あまりのところに新校舎が約束されている。建築はまだ始まってはいないが、古い校舎の修理は既に取りやめになった。

部屋いっぱいいろいろな姿勢で学科の教員たち——助教授や助手たちが腰をおろしている。エネン以外に教授は一人もない、そのことで彼はいつも学長事務局から責められている(「人材養成の努力が足りない」と)。おそらく第一番にクラフツォフが花を咲かせることになるだろう。

輸入器具の入っていた腰高の、みんなに電気椅子と呼ばれている鉄製の箱に腰かけているのがセ

ミヨーン・ペトロヴィチ・スピヴァークで、ビロードのズボンをはいたひげ面の大男なので、この学科では彼のことを《声の通るデブ》と呼んでいる。彼はデブではなくて、とにかくさばっていて場所をとるのである。足を広げて投げ出し、靴（サイズは四十六）のひもは無雑作に結んでいる。口の周りの黒いひげは、寒中の毛皮の襟のように白銀色に縁どられている。この白っぽい色の真中に濡れた唇が目立っている。セミヨーン・ペトロヴィチは、外観はあまりにも巨大で攻撃的ではあるが、総じて美男子である。女子学生たちは、彼がもう年（五十歳近い）であり、また偉大な二点〔落第点〕つけの評判にもかかわらず、夢中になるのだ。彼は、かつて教員会議の時間中に彼の尻の下で椅子がつぶれて以来、原則として鉄製の箱に腰をかけることにしている。そのセミヨーン・ペトロヴィチは、いわゆる熱血漢で、かつとなって誰かと口論し、反撃を許さぬ論拠を挙げて、ドスンと座った途端にこわれてしまったのだ。《そんなに興奮しちゃいけませんよ》と彼の事務担当のリーディヤ・ミハイロヴナは彼を責めるのである。彼女は、この学科で家具に関係のあるただ一人の人間なのだ。ほかの人たちは、椅子がこわれるたびごとに伝統的に思い出すことになっている、言うまでもなく、アレクサンドル・マケドンスキー王についてのありふれた冗談をとばすだけである。

新式家具——脚の細い、低い机、籠の形でもなければ、魚とりのやなの形でもない腰かけや肘掛け椅子——が、昨年大学の設備更新計画に従って学科に配給されてきた。みんなは文句も言わずに引き取ったが、エネンただ一人、三十年代製の自分の巨象机エレファントデスクと離れるのを拒んだ。そして、彼思ったことは間違っていないかったようだ。新しい家具は惨めなほどに頑丈さに欠けていた。半年たつと、これらの家具は、教員たちの言によれば《既に半減期に入った》。机の引き戸は閉じようとしていないし、ひきだしの方は逆に、やっとの思いで引っ張り出す始末だ。椅子の半数は姿を消したが、大

学の家具職人は『薪用だ』と言うだけで修理しようとしなかった。ところがカースリ産の鋳物製品（戦士の頭部の形をしたインク壺）の付いたエネンの机は何十年もたっているのにびくともしない。

ドアからあまり遠くないところに、半白髪の、ぼさぼさの髪をして、細長い顔に相変らずの皮肉な表情を浮べたレフ・ミハイロヴィチ・マールキンがいる。彼は皮肉を言うことを何やら自分の仕事みたいなものにしているようだ。

友だち同士のエラ・デニソワとステラ・ポリャーコワが並んで一つ机に向かっている。エラは鉛色がかったバラ色の皮膚に輝くような金髪をしており、申し分なく学科一の美人である（マールキンは彼女のことを『ミス・サイバネティックス』と名付けている）。だが、これはあまり大きな意味はない。というのはこの学科には女性ほんの僅かしかいないからだ。ステラはエラよりも年上で、美人ではなく、羊のような御面相だが、ハイカラで流行の服装をしており、特に履物がよいと言われている。今彼女はえらく底の厚い靴をはいている。彼女は時々蛇のような形をした脚を机の下から横に突き出して眺めている。

彼女たちのすぐ後は、助手のパーシャ・ルバーキンで、かすんだ眼をして、長髪で、『ヒッピーまがい』の擦り切れたジーンズをはき、吸口付きのタバコを小耳にはさんでいる。彼の声は地下室から聞える感じで、話したい内容に乏しいが、なんとなく面白くはある。彼と並んで対照の妙というか、ドミートリ・セルゲーヴィチ・テルノフスキーがいる。この学科では最古参の一人、年輩で白っぽい濃い髪をしており、古い時代には学者ぶった人と言われたくちである。髪は横分けではなく、頭の真中で分け、チェーホフ風の鎖付きの鼻眼鏡、非の打ちどころのない黒装束は講義が終るごとにブラシで手入れされる。テルノフスキー以外は、教員たちみんなが頭のとっぺんから足の先までチョークで真白になって歩き廻っているのだ。『我らみな白く塗られた者同士（似た者同

「士のごろ合わせ」)、とスピヴァークが言っている。彼の方はどういうわけか、服の前と袖だけでなしに、背中までチョークだらけにしている。

テルノフスキーの後には、椅子の背もたれの上に組んだ手にあごを乗せて、ラージイ・ユーリエフが座っている。細顔で、暗褐色の濃い髪を帽子のように後にのけぞらせ、青年とは言えぬが、長くて淡黄色の美しい歯をのぞかせて若々しく微笑するときは魅力満点だ。ラージイの微笑には抗し難いものがある(この学科ではそれを《放射エネルギー》と言っている)。学科での論争や意見衝突の場合にはラージイはいつも緩衝器的役割を果している。

どうやら、今名を挙げた人たちだけが、報告者の話に耳を傾けているようだが、ほかの人はただ退屈しているだけだ。ある者は人の目を盗んで、こっそりと小説を読んでいる。

報告を行っているのはニーナ・イグナーチエヴナ・アスターシヨワで、浅黒く、真直ぐな矢のような女性で、たいへんな美人と言うわけでなく、うんと若いわけでもない(四十近い)が、均整がとれており、機敏であることから、それなりに魅力的な女性である。彼女には何かかもしかの類に似たところがある。

二点を付けることが問題になっている。たった今、冬の重労働、つまり試験期が終って、残っているのが追試と再試だ。《まだ全部取り入れてはないが、麦刈りは終った。彼らは少しは楽になった》とマールキンは、それをネクラソフの詩で表現した。彼にはいかなる時も引用句がぎっしりつまっていて、たえずそれを会話の中にはめ込むのだが、時にはびったりのものもある。驚くべき記憶力だ。クラフツォフは、それを《非方向性記憶》だと言う。

学科教員会議の計画に従って、試験期間の総括が行われているのだ。アスターシヨワは、大声で、大聴衆を相手にした時の講義調の声で、すぐに書き取りなさいと言わんばかりに、語尾をはっきり

と、書き取りの調子で話している。経験をつんだ教員は、よくこんな風に、概して見せかけだが、尊大な印象を与えながら、大声で、流暢に、権威をもつてしゃべる。職業的に身についただけである。

こんな情況で、報告が続けられる。

「二点を付ける問題は新しいものではありません。毎回の試験ごとに、我々は同じことの繰り返しで、この問題を討議しています。この問題には解決はないのです。《同じ馬車に馬とおじけついた鹿と一緒にたぐわけにはいきません》学長事務局に必要なものは何か。お上の平穩無事です。四点と五点の評価のパーセンテージが、試験ごとにたえず増加し、二点の比率が低下することです。御存知のように、これは上ったり、下ったりするものです。年二回、私たちは屈辱的な行事に参加します。つまり成績向上闘争の経過報告を聴くことです。パーセント、それぞれの割合が計算されます、表が作られます……こんなばかげたことに、多忙な人から時間を奪うなんて恥しいことではないですか」

「その通り」——スピヴァークは大声のバスで賛意を表明した。

「あなたは後で発言願います」——クラフツォフが言った。(エネンは黙っている、眼鏡の奥の表情は謎である)——「続けてください、ニーナ・イグナーチエヴナ」

「続けます。学長事務局の夢は、全学生が五点評価の勉強をすることです。これは明らかに不合理です。というのは《優(五点)》という言葉が、《他より優れている》を意味するからです。背景のない無条件の五点など考えられませんか。それは度量衡万国中央局に保存されているメートル原器ではないのです。試験官は評価に当って、学生の知識を絶対的な物指しではなく、相対的な物指しで計っているのです。」

「いや、そうじゃないんだ」——スピヴァークはやきもきして言った。「問題は五点でなくて二点

にあるのだ。」

クラフツォフは鉛筆で机をつついた。

「報告者はお続けください、他の人は御意見を差し控えるよう願います。」

「続けます。一方に学長事務局があり、他方に我々がいます。彼らに必要なのは形式的な平穩無事であり、我々に必要なのは形式的でない知識です。もちろん、一番簡単なのは、彼らの意向に従って、二点はまったく付けない、三点は最小限に、四点と五点は要求されるだけ付けることです。現実には楽なものになります。自分の良心以外に、我々を非難する者もないでしょう……」

《爪の鋭いけもの、心臓をこそげるもの、良心》「プーシキン「吝嗇の騎士」より」——マールキンが、おべっかをつかうようにつぶやいた。

「そうです、良心です」——暗い顔付きになってアスターシヨワが強調した——「だが、現実が教えているように、これはもろい、頼りのない支えです。人間の行動を支配しているのは良心ではなくて、客観情勢なのです。この情勢なるものは、望むと望まざるとを問わず、我々をして虚偽の世界に押し込みます。虚偽の採点、虚偽の成果、虚偽の報告……」

「あまりに手をお拡げになり過ぎるのではありませんか、ニーナ・イグナーチェヴナ」——クラフツォフは氣をつかいながら尋ねた。

「その反対です、私の手の拡げ方はまったく地域的規模のものです。私は私たちの大学のことを話しているのです。我々の仕事はどう見られているのでしょうか。平均点と二点のパーセンテージによってです。笑止千万です。ほかならぬ我々自身が自分に点数を付けているのです。他の生産分野と比較しましょう。工場や作業場の仕事は、自分らの付ける点数によって評価されるなんて、どこかで聞いたことがありますか。私たちはまさにそうやっています。客観的な検査方法による裏付けの